

手先の動きと子どもの感情 ⑤

清水エミ子

◎見せかけてない、本当の心を表わして知らせてくれる手と指

冬服が夏服に変わる頃になると、子どもたちはよそゆきの自分をぬぎすて、はだかの状態になったように見えてきます。

かぶっていたねこ、がはがれる、などといっています。

自分をすなおに表わして生活するようになったとして、私たち保育者も、その状態の上に、教育を、保育を積み重ねていってしまいがちです。

このすなおさ、はだかだとみえる子どもたちの状態を、本当にそうだと信じてよいのだろうか、心そのままの状態だと受け取ってよいのだろうか。

私は子どもたちの手や指の反応をみつめているうちに、こんな疑問が生まれて来たのです。今までの観察が、今まではんだんやみきわめが、いかに不確かなものであったか、大ざっぱな、信頼性にとぼしいものであったかに気付きはじめたのです。

一、体全体の表情とはちがう反応が手や指先に

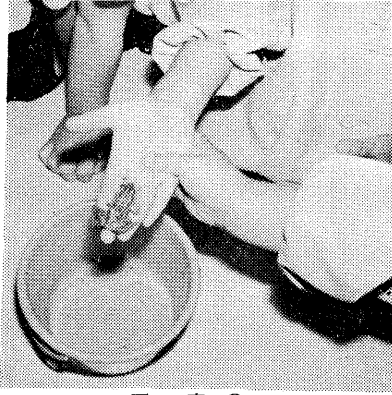
例(1)「やってみるよ、やったらできちゃった」「やれる、へいきだよ」「おもしろいね」
新しい活動にもやっとなどび込んでいこうとするようになったかずひろが、鉄棒の前廻りに取りかかった時のことばなのです。

顔や体全体からもこわがっているようなようすは見られず、かえって、自分の課題に、ちよう戦するよろこびの表われのようにさえゆるやかに受け取れたのです。

しかし、鉄棒からはなれたかずひろは、しばらく手指をぎゅっとにぎりしめて、他の子どもの鉄棒をながめているだけだったのです。そして「こわいでしょ」「まわるとき、へんなきもちになるでしょう」「やっぱりこういうのは、きけんだね」と、ひとりでおしゃべりをして、心の安定を保とうとしているようだったのです。

例(2)「のせてごらん、かみつかないよ、いいからぼくの手にのせてよ」

「ちっともきもちわるくないさ、いいきもち、くすぐったいよ」と、カエルを机の上のせてあそばせていた時のかずひろです。この時も一見、表情は、カエルと楽しんでるように見えます。しかし、手の平、指先をみると、ことばや顔の表情とは



全くちがっているのです。

しゃしん ①

① まわりで見っていた友だちが、それを見

ぬいてしまっ、手の平をおさえ、こわ

さやきんちようをや

わらげてあげる手助

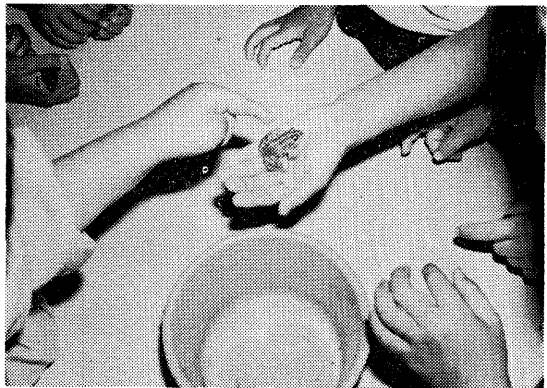


写真 ②

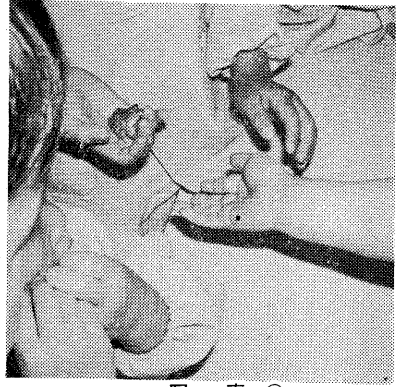
けをしたのです。それからは、しゃしん②の人さし指で、カエルを指さしたり、ことばでいろいろなことをいってみているだけで、手の平にもう一回、カエルをのせることは、しなかったのです。

友だちが「かずひろくん、はい」といってくれようとして

も「うんちちょっとまってる」とか、「さわりたいひとにかしてあげる、ほんとは、ぼくのぼんだけどね」などといって、カエルに指だけ近づけるだけですんだのです。

さし示している手も、親指をぎゅっと三本の指でにぎりしめて、さし示している指の表情からも言葉と心のちがいがわかるのです。

これは、かずひろ以外にみえる指や手の表われをみくらべてみ



③ 眞 写

てもわかるように、同じカエル、それも、友だちの手の平の上にいるカエルを見るというだけでもこのように表われはちがっていることがはっきりわかります。

しゃしん ③

さし示している時から、五分位過ぎた時のかずひろは、カエルのそばで、らくに手の平を出せるようになったのです。

手、うで全体のきんちようがやわらぎ、カエルが、とびうつても、あまりおどろかない状態に変化していったのです。

この日から、三日後に、かずひろは、やっとカエルを手に出せることが、平気のできるようになったのです。

二、課題に対しよする時の子どもたちの表情（みせかけの表情）にごまかされやすい

六月頃になると、自分の参加しているクラスおよびグループのけいこうが、大きっぱであつてもわかりかけてきているので、そ

の中でのひとりひとりの生活のリズムが安定しかかつて来ます。

このリズムが自然に身につくために、心の表われが、みせかけになりやすくなります。（心の表われも自然に無意識のうちにカバーしてしまいがち）

まわりの友だちも、あの子はこんな程度だとか、先生のいう問題も、このくらいのもむずかしさは、このへんでできそうだと、まず、気楽にぶつかって来るふんいきができてきます。

そして、やってみて、これは、手ごわい、これは思ったよりたやすかったと、活動に取りかかるとのはじめより少したってから、本当の心の状態が表われてくるのではないか、ということに気づいたのです。活動のはじめや新しいしげきに、手や指は、何のきんちようもせず、楽な、のんびりとした表情で活動にとびついていくようにみえるのです。

そこで、私が今まで感じていた指や手は他よりも早く反応する、ということが、くりかえしの経験の積み重ねによって、解消してしまうのだろうか？ 集団に参加するはじめての状態しか手や指は示していないのではないかと疑問とまよいが生まれてきたのです。

手や指は、やはり子どものくせや、思いがけない、事がらのみに反応するだけなのではないだろうかとも、考えてしまったのです。しかし、それを通りこして、じっとみつめてみると、手や指

は、活動の本当の中身についての反応を示してくれるということ
がわかったのです。表面だけのぶつかりや反応は本物でない、と
思えてきたのです。

ゆったりとした、手や指の表情に表われる、いろいろのうった
えや、反応の意味することからを、読み取らなくてはならないと
思うようになったのです。

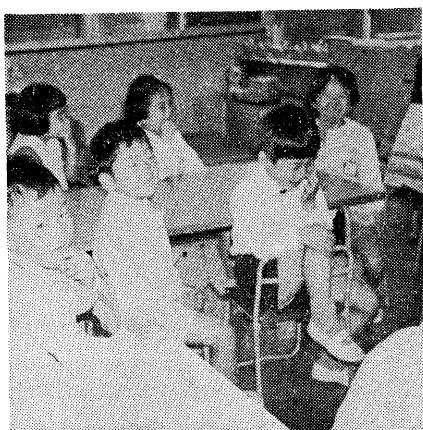
例(1) シャしん ④

えんそくに行く前日、おかしの袋作りをした時の、かずひろ
です。



写 真 ④

何のおかしの次
に、何のおかしを何
個ずつ袋に入れて袋
のふたをするという
課題に対して、二、
三種類の菓子^三を袋に
入れてきて、途中で
自分の行動に不安を
感じ、これでよいの
かたしかめたくなっ
て、こまっているで
す。

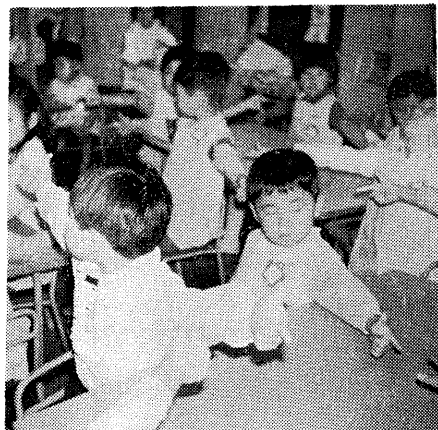


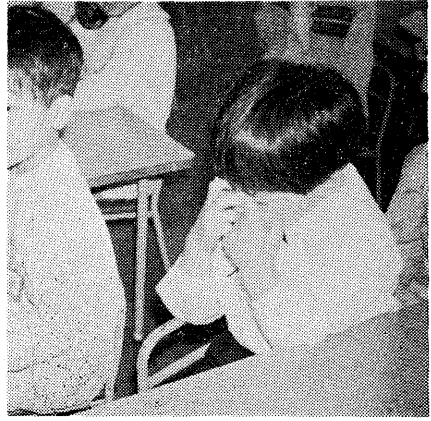
写 真 ⑤

口では、「こ
れでいいんだ、
ラムネを入れた
し」と自分の行
動、活動を反ぶ
くし、かくにん
しているのです
が、手と指は、
全くこまりはて
て、どうしてよ
いかわからなく
なっています。

(中身はまち
がえてはいなか
ったのです。)
友だちの袋の中
身とくらべて、
まちがいのない
ことがわかって
も、手指は、が
っかりしている

写 真 ⑥





写真⑦

表情でうったえていました。

(袋をにぎりし

めたりほっぺに

手をあてがった

りして)

例(2) しゃし

ん ⑤ー⑪

指あそび(数

あそびもかね

た)をした時です。

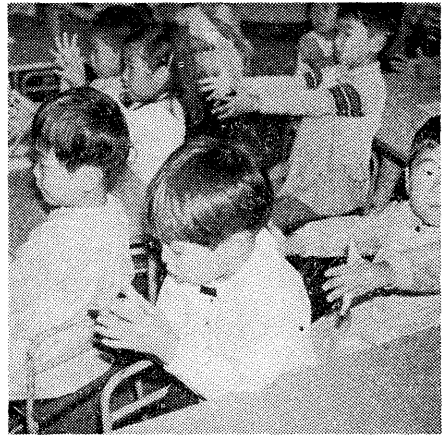
⑤ はじめはイスに足をかけ、らかな状態のかずひろの手や指です。「やれちゃうもの、できるよ」といったりして、顔もわらっています。

⑥ 手をよこに広げて、二の数を指で示している時です。

まだまだ、らかな状態の表われです。

「できた、せんせい、こういう二でしょう」と保育者が、かずひろの方をみるまで、「できたできた」といっていたのです。

⑦ 次に、保育者が「つづけてやってみますよ。だめになった人は正直にやめてまっていますね」といってはじめて、三回目の時の指なのです。(まわりもまちがえてまっていますのに)

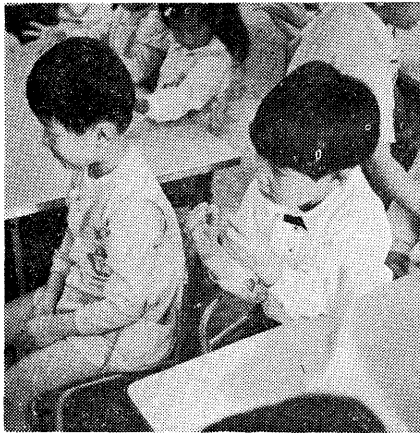


写真⑧

「できるかなー、すぐだめならどうするの」といつづけて次のしゅん間に手や指のエンジンが、ストップしてしまつたのです。

指や手は、やっぱりだめなんだよ、とはくじょうとして表現してくれているのです。

⑧ 皆が次々に活動しているのに、手や指はおじいさんの手のように、たよりなくなつてし



写真⑨

まうのです。ことばは、皆とおなじようにうたをうたっているの
で、苦しそうにはみえないのです。

⑨ 保育者がやってみせている間も、かずひろの手は、こまっ
てもそもそごいていました。

かずひろの目と声は保育者の方を見てみんなとおなじことをし
ているのですが、指だけが他の行動をしまっているのです。

手や指は正直だなあと、この時ほど感じたことはありませんで
した。気持は、やっているつもり、こうしたいとのぞんでも、指
は本当の状態そのままを表わしてしまうのです。



写真 ⑩

課題をはっきり理解していないかずひろの指は、まだよくわか
っていません、まだちょっと不安です、理解が不たしかですと、
うったえ示してくれているのです。

⑩ そしてくりかえしやっているうちに指が、大分わかってき
ました、もうちょっとです、といつてくれています。

⑪ まだまだ完全にだいたいようぶではないけれど、九分通り、
みんなにおいつくことができたのです。

このように、かずひろのことばや、顔からの表われではよみと
りにくいところを、指や手はしらせてくれているのです。

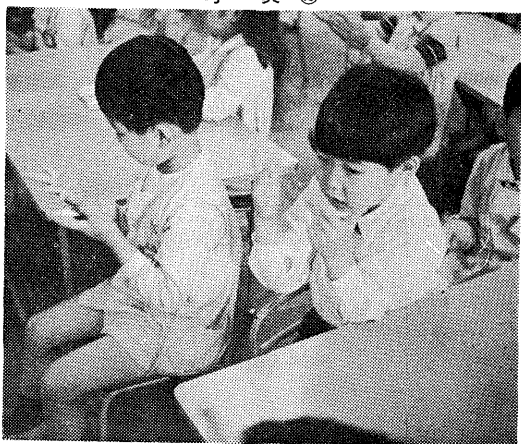


写真 ⑪

手や指が「かずひろくんの状態はこ
うですよ」と信号をおくり、その信号
をうけとって体が表情で示してくれ
ているのではないのでしょうか。

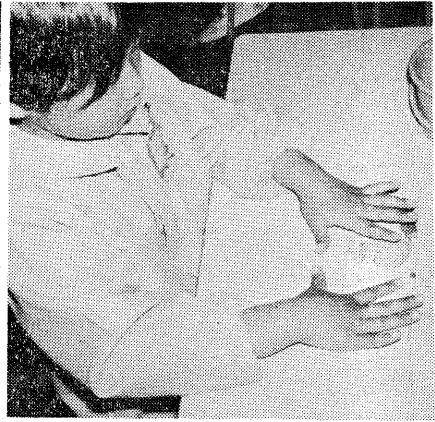
例③) ふだん行なっていることがら
でも課題として示されると、心はきん
ちようする。

やはりやってみながらの表情のちが
いを、見落とさないようにしたい。

ハンカチーフをきちんとたたんでし
ましましょう、というらかな課題をあ
たえた時の、かつら子の状態です。し



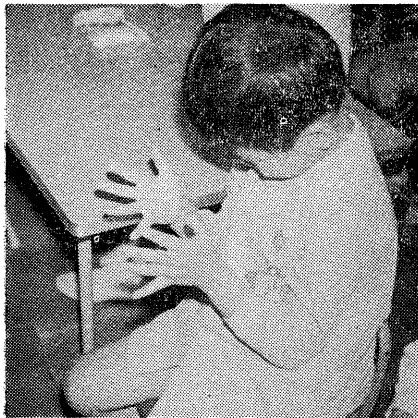
写 真 ⑬



写 真 ⑫

⑬ しかし、洗たくの時のほし方で、ハンカチーフのへりが、でこぼこでなかなかびったりあい

やしん⑫―⑬
⑫ らくな気持で、ちょっと女の子らしく、しなをつけてすまして、ハンカチーフをかきねました。きちんと、という課題を、いつもやっているからへいき、へいきという気持で受けとめて、やりだしたのでしよう。



写 真 ⑭

⑭ でもわか

しゃしん⑭―⑯
⑯ 指の名前あてをしている時です。

例(4)

ません。くりかえしているうちに、これはごわいとこまりはじめました。
⑬ こんどは真げんに、ハンカチーフのへりをかきねはじめています。
指も、そりかえり、力が入ってきています。そして「ほすとき、まっすぐしないとたためないね」とまわりの友だちに話しかけていました。
ハンカチーフをたたむというかんたんな活動の中での心の動きも、指ははっきりと示してくれるのです。
顔や、体全体からではよみとりにくい心のうごきが、指をみつけているとわかります。



写真 ⑮

るように、はじめは、保育者の話をきちんときいているので、指や手もきちんと行動していません。そして、簡単な表われを示しています。しかし、この子は指の名前もはっきりわかっているのに、くりかえすことに、あきてきました。

⑮ そこで手は、もうたくさんだ、といってしまっていますし、保育者の話を聞いていませんよ、心の中は、からっぽです、とおしえてくれているのです。

保育者は、この子どもの顔だけみていたのでは、この子が何もきいていない、何の活動もしていない休みの状態になっていることがわかりにくいのです。

しかし、手や指をみるとはっきりわかります。

⑯ の子どもの手も、おなじです。顔は保育者の方をみているし、ただひじをついているのではないかと、みせかけの表われで

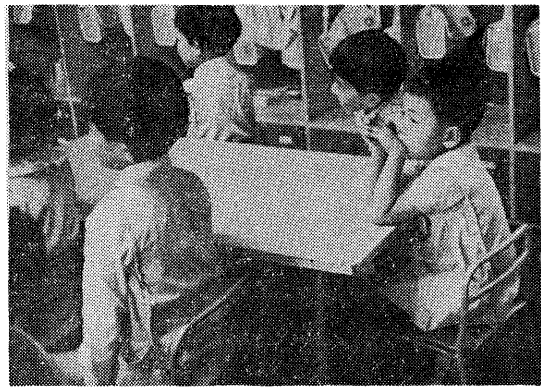


写真 ⑯

ごまかされやすい状態です。しかし、よく指と手を見つめると、だらりとしていってしまうので、ときよひを示していることがわかります。そしてこの⑯は、きよひだけでなく自分勝手なことを考えているのです。

このように手や指の表われを見つめると、子どもたちの生活のながれを、さしわたししているのが、手や指のように考えられます。活動から活動にうつる時、ひとりひとりの手や指の表われをよみとり、そこから次にスムーズに移向させていく手がかりをつかむために、大切な表われだと思ふのです。その表われかたも、ひとりひとりがいます。そしてうったえ方にも個性があるようです。ひとりひとりの子どもの手の表われをしっかり見つけ、そのけいこうをよみとるくんれんを保育者はしなくてはなりません。